

**横浜市立 旭小学校 学校評価報告書 (平成28～30年度)**

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①各教科とも、身に付けたい力を明確にしなが 授業を組み立てることで、「分かる」授業づくりを 進めるとともに、子どもの「つまづき」に対応でき よう指導と評価の一体化を図る。②話し合い活 動など、自他の思いや考えを交流する場面を大 切にし、子どもがそれをもとに考えを深めながら 自らを表現できるよう授業改善を図る。	学状の結果では前年度と大きな変化はないが、引き続き授業改善を図っていく必要 がある。また、「子ども同士がつながる表現 活動」に取り組む、お互いに表現し合うこと で自分の考えを深めることができた。また、 学習の形態を工夫することで、子どもが互 いの見方・考え方を交流することがしやす くなったと思われる。	B
豊かな心	①「あさひっこ」の活動を充実させ、遊びの交流 や集会等を通して異学年とのかかわりを深める。 ②各教科や領域の時間など、考えた表現したり する活動を大切に、思いやる心情、気持ち考 える態度を養う。③あいさつや協力し合う態度 を大切に。よりよい行動を選択し、実践できる ように、給食や掃除、休み時間の関わりなどの 様々な機会に声をかけ支援していく。	「あさひっこ」の活動を見直し、充実させた ことで、異学年交流が確実に深まった。た てわりを取り入れた運動会や全校遠足も 成功し、成果が入りもたの姿に表れた。 学年ごとの「目指す子ども像」を明確にして 支援するなど、次年度も引き続き取り組ん でいきたい。あいさつでもできるよになっ ていくので、引き続き取り組んでいきたい。	B
健やかな体	①学校保健委員会を年間3回実施し、「目標設 定」「中間のふり返り」「まとめ」を計画的に行うこ とで、子ども一人ひとりが自分事として捉え、自 分の生活習慣を見つめる機会とする。また、学校 保健委員会での取組を「学校だより」や「保健だ より」で家庭にも伝え、協力を呼びかける。②一 校一実践運動の中で「集団での遊び」や「1人 でできる遊び」を紹介し、外遊びへの関心を高め	市体育協会の協力を得て、「健康な体づく り」をテーマにした学校保健委員会を行 い、毎回実際に運動をすることで、またそ の後も、その内容を生かして児童が啓発 活動を行ったことで、子どもの運動や体づ くりに対する意識が高まった。また、ロング 屋体の導入や各種週間、特設クラブなど 、運動の機会を多くとるよう取り組ん	B
児童生徒指導	①年度初め(4月)と月に一度、児童の情報を共有 する時間を設け、配慮を要する児童の理解と 対応を共有する。②YPアセスメントを年2回行 い、一人一人の実態を把握するとともに、いじめ 等の早期発見と校内組織の整備につなげる。③ 学校スタンダードを共有し、各学級が同じスタ ンスで指導することで規範意識を育てる。	専任を中心とした児童支援体制が確立し、 様々な課題に対応することができた。各種 研修を積極的にを行い、職員児童支援に 対する意識も高まってきている。今年度か ら始めたYPアセスメントによる分析と支援 については、次年度も継続し成果につなげ ていく。学校スタンダードを見直し、確実な 定着のための手立てを考えていきたい。	B
特別支援教育	①様々な課題に対して、ケース会議等を通して 複数の体制で問題解決に臨み、よい対応を 心がける。②学校で解決が難しい場合は、諸機 関(児童相談所・区役所など)や専門機関(地域 療育センター・医療機関・通級指導教室・学校カ ウンセラー・特別支援学校など)と連携を図る。	課題のある児童について「ケース会議」を 開催し、短期目標や支援方法を共有する など、チームで支援に取り組んだことで成 果が上がってきた。今年度は、SSWや児相 と連携したことが有効に機能し、事案の解 決につながったこともあった。今後も、必要 に応じて関係機関とつながり、連携して支 援を進めていきたい。	B
安全管理	①危機管理マニュアルが生きて働くものとなるよ う、児童の安全を守る観点から精査するととも に、関係諸機関と適切につながるようする。② 緊急事態が実際に発生したことを想定した臨 場感のある各種訓練や研修を行い、教職員の危機 管理意識が高まるようにする。③児童が安全に 登校できるよう、保護者と協働しながら集団登 校のシステムを確立させる。	児童の安全訓練の内容を見直し、より実 際に近い場面設定をすることで、切実感 をもって取り組めたこと考え、子どもだけ でなく教職員にも予告をしない訓練を行っ たことも意義があった。また、集団登校時 のトラブルについて、何件か保護者から相談 があったので、通学路の見守りを管理職、専 任、当番の職員で行うこととした。	B
a18			
人育成・組織運営	①授業力向上のため、教職員が各種研修、研究 会に参加しやすい環境を整備し、学んだこと を実際の場面に生かせるようにする。②メンター チームを5年次以下の教職員を中心に組織し、メン バーの必要感や自主性が生かせるよう充実した 内容となるよう工夫する。③教職員がゆとりを もって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見 直し、業務の効率化を図る。	職員それぞれが自身の目標をもち、その 達成に向けて取り組んだ。また、チームと して取り組む風土もできている。経験年数 が少ない職員が多いが、学校運営への参 画意識も高まってきている。メンター研 究の活動が活発になり、今年度は授業を併 した研究を中心に進めた。今後も柔軟な発 想で、自主的に研修を進めることが期待さ れる。	B
ブロック内相互評価後の気付き	中学校との連携としては、児童・生徒支援専任 や教職員交流会等で、授業内容や教育課程、 児童・生徒指導について内容の濃い情報交換 を行うことができていた。本校が継続して 取り組んでいる「あいさつ」については、 寺尾中でも力を入れており、小中9年間 で継続して指導することで、よりよ い人間関係を築いていくことのできる子 の育成につながっていくことができると考 えている。また、教務主任会において、 寺尾中学校区の小学校同士で学校運 営の工夫について情報交換し、成果や課 題について確認することができた。今後は、 新指導要領実施に向けて、各校の特色 ある教育課程編成についての情報交換も 行っていく必要があると考えている。	ブロック内の全校が「あいさつ」及び「た てわりでの異学年交流」に取り組んでい るため、小中9年間を通して「あいさつ」と 「異学年交流」への意識を高める指導を 継続して行うことができる体制にある。 また、「いじめへの対応」については、専 任会をはじめ、小学校の前6年担任と中 学校が「情報交換を適宜行う等の体制が できているため、児童生徒をより多く の目で見守ることができている。一方 で、「学力向上・授業力向上への取組」が 十分でないとの反省もある。各校で行 っている重点研究の視点がブロック内 で共通理解されておらず、小中一貫の 視点が抜けてしまっているためであると 考えられる。	B
学校関係者評価	日常の子どもの様子はもちろんだが、学校 評価における保護者アンケートの結果やそ の考察について詳細まで説明し、理解を いただくことができた。また、集団登校 についても、「子どもが安心して歩けるよ うにしたい。」と良い評価をいただいた。 今年度力を入れた「あさひタイム」での 「たてわり」については、「大変意義深いこ とだ。」と高い評価をいただいている。こ れから、さらに学校と地域との連携を 深めていくことで共通理解をすることが できる。	今年度も、日々の教育活動の様子やい じめ防止基本方針、保護者アンケートの 結果と考察などを報告し、説明したが、概 ね理解いただくとともに、どれも対し て高い評価をいただいている。また全 面での懸案となっている下校時の安全 管理について、どの自治会からも、是非 協力したいという旨の返事をいただい た。今後、案のさらなる具体化ととも に、自治会とも相談をしていながら、新 たな「見守り組織」ができるよう取り組 んでいきたい。	B

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①各教科とも、身に付けたい力を明確にしなが 授業を組み立てることで、「分かる」授業づくりを 進めるとともに、子どもの「つまづき」に対応でき よう指導と評価の一体化を図る。②話し合い活 動など、自他の思いや考えを交流する場面を大 切にし、子どもがそれをもとに考えを深めながら 自らを表現できるよう授業改善を図る。	重点研究を生活科・理科とし、問題を主 体的に解決していく力の育成を目指した が、子どもが問題を見付け、それを見通 し、もっと追究していく姿が少しずつ見 られた。また課題はあるが、次年度も 引き続き学校全体で取り組んでいき たい。また、自分の考えを表現するとい うことでは、昨年度までの国語の研究 の成果が感じられた。	B
豊かな心	①「スマイルフレンズ活動」を充実させ、交流 や集会等を通して異学年とのかかわりを深める。 ②各教科や領域の時間など、考えた表現したり する活動を大切に、思いやる心情、気持ち考 える態度を養う。③幼保小連携推進地区 としての取組を進め、円滑な接続を図ると ともに、入学期の子どもの安心して生活 できるよう、スタートカリキュラムの充 実を図る。	「たてわり」を「スマイルフレンズ」と 名称を変え、異学年同士の交流がよ り充実するよう取り組んだ。成果が感 じられる一方、今までの活動から脱却 し、活動内容を柔軟に考えていくこと も必要であると考え、幼保小の交流 やスタートカリキュラムの実施につ いては、子どもの学びの充実や円滑な 接続という面で一定の成果が見られ た。	B
健やかな体	①学校保健委員会を年間3回実施し、「目標設 定」「中間のふり返り」「まとめ」を計画的に行うこ とで、子ども一人ひとりが自分事として捉え、自 分の生活習慣を見つめる機会とする。また、学校 保健委員会での取組を「学校だより」や「保健だ より」で家庭にも伝え、協力を呼びかける。②一 校一実践運動の中で「集団での遊び」や「1人 でできる遊び」を紹介し、外遊びへの関心を高め	今年度も、学校保健委員会では市体育 協会の協力を得て、「健康な体づく り」をテーマにした活動を行い、運動 する習慣の定着を図った。また、その 内容を生かして委員会の児童が啓発 活動を行ったことで、運動や体づく りに対する意識が高まった。また、特 設クラブに多くの子どもが参加し、こ こでも運動習慣をつけるという面 で一定の成果があった。	B
児童生徒指導	①年度初め(4月)と月に一度、児童の情報を共有 する時間を設け、配慮を要する児童の理解と 対応を共有する。②YPアセスメントを年2回行 い、一人一人の実態を把握するとともに、いじめ 等の早期発見と校内組織の整備につなげる。③ 学校スタンダードを共有し、各学級が同じスタ ンスで指導することで規範意識を育てる。	今年度も、SSWや関係機関等と交 えたケース会議を数回開き、それがそ の後の支援に生かすことができた。保 護者ともつながることができ、大変役 に立った。学校カウンセラーへの相 談も増えたことも、保護者とのつな がりが増えてきたこと、保護者との つながりができてきたこと、保護者 のサポートが児童に対する支援に、 児相のカンファレンスを活用したこ とも効果	B
特別支援教育	①様々な課題に対して、ケース会議等を通して 複数の体制で問題解決に臨み、よい対応を 心がける。②学校で解決が難しい場合は、諸機 関(児童相談所・区役所など)や専門機関(地域 療育センター・医療機関・通級指導教室・学校カ ウンセラー・特別支援学校など)と連携を図る。	今年度も、SSWや関係機関等と交 えたケース会議を数回開き、それがそ の後の支援に生かすことができた。保 護者ともつながることができ、大変役 に立った。学校カウンセラーへの相 談も増えたことも、保護者とのつな がりが増えてきたこと、保護者との つながりができてきたこと、保護者 のサポートが児童に対する支援に、 児相のカンファレンスを活用したこ とも効果	B
安全管理	①危機管理マニュアルが生きて働くものとなるよ う、児童の安全を守る観点から精査するととも に、関係諸機関と適切につながるようする。② 緊急事態が実際に発生したことを想定した臨 場感のある各種訓練や研修を行い、教職員の危機 管理意識が高まるようにする。③児童が安全に 登校できるよう、保護者と協働しながら集団登 校のシステムを確立させる。	安全訓練の内容を見直し、より発災時 に近い形での安全訓練を行うことで、 子どもだけでなく、職員も緊張感 をもって臨んだことで、意識の向上 につながった。また今年度、低学年 児童の交通安全事故が重なったこと を受け、地域へ協力を仰ぎ学 援隊のような組織が結成できるよ う動いている。	B
いじめへの対応	①職員間での情報共有の機会を増やし、小さな ことでも見逃さず、学年・学校で対応できるよ うにする。②各教科、道徳において、児童に自 己を見つめ、より多面的・多角的にとらえ、自 らの考えを深める力育てる。③いじめ発生が認 められた場合、いじめ対策チームを立ち上げ、 効果的な対応ができるようにするととも に、保護者と協働しながら指導を進めら れるようにする。	「いじめ防止基本方針」に沿って いじめの防止・早期対応に努めた。 職員研修も行った。また、いじめ の早期発見やその対応について理 解を深めた。また、子ども一人 ひとりと面談をして、今困っている ことについて聴き取り、支援に生 かした。また事例があった際には、 対策チームで被害が大きくならな いよう指導をした。	B
人育成・組織運営	①授業力向上のため、教職員が各種研修、研究 会に参加しやすい環境を整備し、学んだこと を実際の場面に生かせるようにする。②メンター チームを5年次以下の教職員を中心に組織し、メン バーの必要感や自主性が生かせるよう充実した 内容となるよう工夫する。③教職員がゆとりを もって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見 直し、業務の効率化を図る。	経験年数の少ない若い職員が多いが、 それぞれが自分の役割意識をもち、 意欲的に日々の教育活動に取り組ん でいると感じる。メンター研 究については、中堅の教員や主 幹教諭も参加できるようにする など、柔軟な計画が立てられる よう工夫が必要であると思われ	B
ブロック内相互評価後の気付き	中学校との連携としては、児童・生徒支援専任 や教職員交流会等で、授業内容や教育課程、 児童・生徒指導について内容の濃い情報交換 を行うことができていた。本校が継続して 取り組んでいる「あいさつ」については、 寺尾中でも力を入れており、小中9年間 で継続して指導することで、よりよ い人間関係を築いていくことのできる子 の育成につながっていくことができると考 えている。また、教務主任会において、 寺尾中学校区の小学校同士で学校運 営の工夫について情報交換し、成果や課 題について確認することができた。今後は、 新指導要領実施に向けて、各校の特色 ある教育課程編成についての情報交換も 行っていく必要があると考えている。	ブロック内の全校が「あいさつ」及び「た てわりでの異学年交流」に取り組んでい るため、小中9年間を通して「あいさつ」と 「異学年交流」への意識を高める指導を 継続して行うことができる体制にある。 また、「いじめへの対応」については、専 任会をはじめ、小学校の前6年担任と中 学校が「情報交換を適宜行う等の体制が できているため、児童生徒をより多く の目で見守ることができている。一方 で、「学力向上・授業力向上への取組」が 十分でないとの反省もある。各校で行 っている重点研究の視点がブロック内 で共通理解されておらず、小中一貫の 視点が抜けてしまっているためであると 考えられる。	B
学校関係者評価	日常の子どもの様子はもちろんだが、学校 評価における保護者アンケートの結果やそ の考察について詳細まで説明し、理解を いただくことができた。また、集団登校 についても、「子どもが安心して歩けるよ うにしたい。」と良い評価をいただいた。 今年度力を入れた「あさひタイム」での 「たてわり」については、「大変意義深いこ とだ。」と高い評価をいただいている。こ れから、さらに学校と地域との連携を 深めていくことで共通理解をすることが できる。	今年度も、日々の教育活動の様子やい じめ防止基本方針、保護者アンケートの 結果と考察などを報告し、説明したが、概 ね理解いただくとともに、どれも対し て高い評価をいただいている。また全 面での懸案となっている下校時の安全 管理について、どの自治会からも、是非 協力したいという旨の返事をいただい た。今後、案のさらなる具体化ととも に、自治会とも相談をしていながら、新 たな「見守り組織」ができるよう取り組 んでいきたい。	B

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①各教科とも、身に付けたい力を明確にしなが 授業を組み立てることで、「分かる」授業づくりを 進めるとともに、子どもの「つまづき」に対応でき よう指導と評価の一体化を図る。②話し合い活 動など、自他の思いや考えを交流する場面を大 切にし、子どもがそれをもとに考えを深めながら 自らを表現できるよう授業改善を図る。	生活科・理科の重点研究が2年目となり、 視点をより絞って研究を進めた。具体的 には、導入で子どもの問題意識をどう高 めるか、そして追究での深まりをどう 高めるかに焦点を当てた。実践を通 じて、根拠のある考えをもち、それを表 現しようとする子どもの姿が見られる など、一定の成果を上げることができ た。今後も、日々授業改	B
豊かな心	①「スマイルフレンズ活動」を充実させ、交流 や集会等を通して異学年とのかかわりを深める。 ②各教科や領域の時間など、考えた表現したり する活動を大切に、思いやる心情、気持ち考 える態度を養う。③幼保小連携推進地区 としての取組を進め、円滑な接続を図ると ともに、入学期の子どもの安心して生活 できるよう、スタートカリキュラムの充 実を図る。	「スマフ」の活動が定着し、高学年の リーダーとしての意識の高まり、自ら 主体的に活動に取り組む姿が随所に見 られた。全校遠足や運動会での取組も 成果が上がっている。幼保小連携推 進地区の取組も2年目となり、今年 度は園と高学年との交流の充実など、 交流の幅を広げることができた。3年 目の次年度も、各学年での交流の	B
健やかな体	①学校保健委員会を年間3回実施し、「目標設 定」「中間のふり返り」「まとめ」を計画的に行うこ とで、子ども一人ひとりが自分事として捉え、自 分の生活習慣を見つめる機会とする。また、学校 保健委員会での取組を「学校だより」や「保健だ より」で家庭にも伝え、協力を呼びかける。②一 校一実践運動の中で「集団での遊び」や「1人 でできる遊び」を紹介し、外遊びへの関心を高め	全ての学級が学校保健委員会 で計画した活動をしっかり行うことが できるようになり、保健委員会の児童 が中心となって呼びかけたことで、 どの学級でも効果的な取り組みが できていた。運動委員会や集会委員 会が中心となって、運動に親しむ集 会を数多く実施したことで、外遊 びへの関心が高まり、運動に親しむ 児童が増えていく。	B
児童生徒指導	①年度初め(4月)と月に一度、児童の情報を共有 する時間を設け、配慮を要する児童の理解と 対応を共有する。②YPアセスメントを年2回行 い、一人一人の実態を把握するとともに、いじめ 等の早期発見と校内組織の整備につなげる。③ 学校スタンダードを共有し、各学級が同じスタ ンスで指導することで規範意識を育てる。	引き続き、専任を中心とした児童 支援体制の充実のために取り組んで おり、日々様々な課題に対して、チ ームとしてその解決・改善にあた った。今年度は、教職員数の不足 から、課題のある児童に対する支 援・見守り体制の確保に苦慮した。 限られた人数で、どのように支援 体制を組んでいくか、今後も検討 していく必要がある。	B
特別支援教育	①様々な課題に対して、ケース会議等を通して 複数の体制で問題解決に臨み、よい対応を 心がける。②学校で解決が難しい場合は、諸機 関(児童相談所・区役所など)や専門機関(地域 療育センター・医療機関・通級指導教室・学校カ ウンセラー・特別支援学校など)と連携を図る。	今年度も、関係諸機関と連携した 対応が取れるようにした。虐待につ ながる事案に対して子どもの様子 を注意深く見とり、区役所や児相 と連携して対応することで、子 どもが少しでも安心して生活でき るよう取り組んだ。また、一般級 に在籍する子どもへの合理的配慮 の部分で、保護者とも共通理解を 図るかなど対応のあり方につい	B
安全管理	①危機管理マニュアルが生きて働くものとなるよ う、児童の安全を守る観点から精査するととも に、関係諸機関と適切につながるようする。② 緊急事態が実際に発生したことを想定した臨 場感のある各種訓練や研修を行い、教職員の危機 管理意識が高まるようにする。③児童が安全に 登校できるよう、保護者と協働しながら集団登 校のシステムを確立させる。	より発災時に近い形での安全訓練 を行い、子ども・教職員が緊張感 をもって臨んでいる。PTAと協働 した集団登校のシステムが定着し ており、年2回の地区班安全指導 も実施している。しかし、保護 者の理解の違いによるトラブルが 数件発生し、対応が難しいケース が出てきているので、集団登校 のあり方を全体で再度共通理解を する	B
いじめへの対応	①職員間での情報共有の機会を増やし、小さな ことでも見逃さず、学年・学校で対応できるよ うにする。②各教科、道徳において、児童に自 己を見つめ、より多面的・多角的にとらえ、自 らの考えを深める力育てる。③いじめ発生が認 められた場合、いじめ対策チームを立ち上げ、 効果的な対応ができるようにするととも に、保護者と協働しながら指導を進めら れるようにする。	今年度も、引き続き「いじめ防止 基本方針」に沿っていじめの防止・ 早期対応に努めた。また、職員研 究を行い、いじめの早期発見やそ の対応、またいじめを見逃さない 意識をもつことなど、実践的に理 解が深められるようにした。また、 毎週行っている情報交換会では、 各学年での事案について学校全 体で共通理解を図り、チームとし	B
人育成・組織運営	①授業力向上のため、教職員が各種研修、研究 会に参加しやすい環境を整備し、学んだこと を実際の場面に生かせるようにする。②メンター チームを5年次以下の教職員を中心に組織し、メン バーの必要感や自主性が生かせるよう充実した 内容となるよう工夫する。③教職員がゆとりを もって子どもたちに向き合えるよう業務内容を見 直し、業務の効率化を図る。	経験年数が少ない職員が多い中、 皆大変意欲的に職務に取り組んで いるという状況は変わらない。反 面、今年度は初任者が学級経営、 児童指導に困難を感じ、途中で 退職する問題ということがある。 本人の個人的な問題も大きかった と思われるが、学校全体の人材育 成のあり方について、再度見直 していきたい。	B
ブロック内相互評価後の気付き	中学校との連携としては、児童・生徒支援専任 や教職員交流会等で、授業内容や教育課程、 児童・生徒指導について内容の濃い情報交換 を行うことができていた。本校が継続して 取り組んでいる「あいさつ」については、 寺尾中でも力を入れており、小中9年間 で継続して指導することで、よりよ い人間関係を築いていくことのできる子 の育成につながっていくことができると考 えている。また、教務主任会において、 寺尾中学校区の小学校同士で学校運 営の工夫について情報交換し、成果や課 題について確認することができた。今後は、 新指導要領実施に向けて、各校の特色 ある教育課程編成についての情報交換も 行っていく必要があると考えている。	・8月の小中職員交流会において、 寺尾中ブロック教務主任会で作 成した「ぐるぐる」に示された『学 校の教育課程全体で教科等横断的 に育成を目指す資質・能力(付箋部 分)』の中から、各教科等で育成 を担うことができる(担うことが 適当である)資質・能力を明確化 し、育成のための手立てを考え た。これにより、ブロック内各 校の教育課程に小中一貫の視点 をもたせることができるようになった。 ・寺尾中ブロック全校において、 若干の形は違えど異学年交流の 活動が行われているので、中 学校進学後も異学年交流に意味 を見いだして活動することができる ものと考えられる。	B
学校関係者評価	日常の子どもの様子はもちろんだが、学校 評価における保護者アンケートの結果やそ の考察について詳細まで説明し、理解を いただくことができた。また、集団登校 についても、「子どもが安心して歩けるよ うにしたい。」と良い評価をいただいた。 今年度力を入れた「あさひタイム」での 「たてわり」については、「大変意義深いこ とだ。」と高い評価をいただいている。こ れから、さらに学校と地域との連携を 深めていくことで共通理解をすることが できる。	・学校で行っている学習指導は、 子どもたちにとってわかりやす いものになっている。今後は、 さらに子どもの特長や課題に寄 り添った指導をお願いしたい。 ・学校が大切にしている異学年 交流によって、多くの子どもが 学年の枠を超えて仲良くなってい る。 ・学校は、保護者が授業参観する 機会(授業参観、オープンスク ール、音楽朝会等)を適切に設 けており、保護者が気楽に学校 を訪れる雰囲気がある。 ・教職員に欠員が出たときに補 充されない今の状況では、教 職員の負担が増え、一方であり、 子どもへの指導に支障がある ので、早急に改善してほしい。	B

**学校経営中期取組目録振り返り**  
今年度から、教職員全員で話し合っ  
て導き出したキーワード、「安心」「つ  
ながり」を中心に据えて学校づくり  
を進めてきた。その方向性が共有でき  
ていること、具体的な一歩を踏み出す  
ことができた一年であった。「安心」  
では「児童支援体制」の確立やチ  
ームで進める「特別評価」に、「つな  
がり」では「あさひタイム」での異  
学年交流の充実や「たてわり」を取  
り入れた運動会の実施などで、大  
きな成果が見られた。次年度も同  
じ方向性で進めていくが、反省点  
や課題も出ているのでそれらを改  
善していくことが求められる。また、  
「子ども同士がつながる学び」の  
目標は、「どんな力を身に付けさせる  
かをさらに吟味しながら取組を進  
めていきたい」

**学校経営中期取組目録振り返り**  
教職員全員で話し合っ  
て導き出したキーワード、「安心」「つ  
ながり」を中心に据えた学校づくり  
の2年目になる。昨年度を取組  
を受けて今年度であったことも、  
円滑に教育活動を進めることが  
できた。新しい取組としては、「幼  
保小連携推進地区」の取組が始  
まり、6年間の「安心」「つな  
がり」の土台をつくるというスタ  
ンスで、接続・連携のあり方につ  
いて研究、実践を進め、一定の成  
果を得ることができた。また1年  
目であるので、今後さらなる充  
実に向けて取り組んでいきたい。  
次年度は、新学習指導要領の実  
施に向けて、学校教育目標の見  
直しやグランドプランの検討に  
着手していき

**学校経営中期取組目録振り返り**  
「安心」「つながり」を大切に  
した学校づくりの3年目を迎えた。  
児童の実態や成長の様子、保護  
者・地域の評価などから3年間  
というスパンで考えると、一定  
の成果を上げることができた。  
人材育成の面でも、教職員が自  
らの目標や役割意識をもち、そ  
れぞれがステップアップするこ  
とができた。ただ、今年度1年  
間を考えると、年度途中から、  
臨任が配置されないことによる  
教職員の不足が大きくなり、学  
校経営の厳しい局面があった。  
この難局を乗り切ったことから  
得られた経験や事柄を次年度  
の学校経営に生かしていき  
たい。また、新学習指導要領の  
実施に向けた準備も加速させて  
いき